授業探訪

総合系科目・スポーツ実習「スポーツスタディ４（はじめての和太鼓）」

和太鼓を通した学びの可能性

コミュニティ福祉学部准教授　ライトナー カトリン ユミコ

はじめに

木でできた胴に皮を張り、それを振動させて音を出す和太鼓は、残響が非常によく響き、余韻が残る音を特徴とするが、その音を耳で聴いて音楽として楽しむだけでなく、太鼓による振動が全身に伝わり、身体に響く太鼓の鼓動にワクワクするとともに、心も不思議と落ち着く。また、芸能の一つとして、太鼓演奏者がリズムに合わせてバチの運びや演技を工夫し、笑顔で声を掛け合いながら披露する和太鼓パフォーマンスに感動し、元気づけられたことがある人も少なくないだろう。和太鼓とは、祭礼、歌舞伎および能、神社仏閣における儀式などに用いられる打楽器であり、長い歴史を持つ日本の伝統文化の一つであるが、非常に多くの娯楽やエンターテインメントなどにあふれている現在の社会においては、和太鼓に触れる機会も少なくなり、その存在感が少しずつ薄くなりつつあるともいえるのではないだろうか。特に若い世代を中心に、益々進化する技術やテクノロジーなどによって開発される新しいものへの興味関心が高くなるがゆえに、一方で古くから存続しているものを魅力的に感じ、それらの意義や価値に気付かずにいることも多々あるに違いない。

しかし、古いものがあってこそ新しいものがあるともいえるように、古いものを大切にしつつも、新しいものを受け入れることも重要なのではないだろうか。日本の和太鼓に関しても、祭り太鼓から舞台演奏へといったように、これまでの歴史においても伝統的な和太鼓から新しい和太鼓時代への発展がみられている。さらに、近年は、「和太鼓エクササイズ」や「太鼓ビクス」などの名称でストレス発散やダイエット効果などを謳って、新しい運動文化としても和太鼓が注目されはじめている。

以上のことを背景に、2021 年度から全学共通科目の「スポーツ実習」に位置付けられている「スポーツスタディ４－はじめての和太鼓」という科目を開講することとなった。本科目は、和太鼓の理解と演奏の実践を通して、日本の伝統文化の考え方と方法について理解するとともに日本文化および運動文化としての和太鼓演奏の技術と方法について考究することを目的としている。和太鼓を体験したことがない初心者を主な対象とし、和太鼓の打ち方や基本動作、さらに、演奏に必要な基本的な技術を身に付ける。また、和太鼓の文化的な享受能力を高めるとともに運動文化の一つとして体力向上や健康増進を図り、身体表現や自己表現の可能性を広げるという、多様な側面を持つ授業展開となっている。

はじめての開講となった 2021 年度においては、定員を上回る履修申請があったが、多様な学部学科の 1 ～ 4 年次生 22 名が「はじめての和太鼓」を受講することとなった。そのほとんどは、和太鼓未経験の学生であり、「経験したことのない和太鼓に挑戦してみたかった」、「日本文化である和太鼓に興味関心があった」、または、「他のスポーツ種目と異なる運動を体験してみたかった」、「スポーツは苦手だが、和太鼓で運動不足を解消できればと思った」などという理由で本科目の履修を希望していた。

授業の概要と主な内容および学習方法

「スポーツスタディ 4 －はじめての和太鼓」は、週に 1 コマを受講する形式ではなく、連続コマを少ない日数で実施する集中講義として開講されている。2021 年度の初開講においては、3 日間の土曜日を利用して授業を実施することとなり、履修生は 3 日間ともそれぞれ十分な時間の中で本格的に和太鼓に取り組むことができた。また、本授業は教員 2 名で対応するチームティーチング体制を取っており、和太鼓のキャリアが長いゲスト講師による実践知を活かした授業である。日本国内だけでなく、海外でも和太鼓を演奏する経験が豊富な外部講師による専門性の高い指導を受けられる点は、学生にとってとても貴重な経験だったことから、毎回長時間にわたる多少厳しい授業スケジュールでも、和太鼓と向き合い、また、自身の成長も実感しながら、最後まで積極的に授業に参加するモチベーションにつながったように思う。

また、本授業は理論的な内容を中心とした講義と、実際に和太鼓を体験する実技で構成されており、座学と実践のいずれも含む幅広い学習を行うことに重点を置いている。学生は、5 つの異なるタイプの太鼓から構成される、合計 14 個の太鼓を体験できるようになっており、受講環境も充実しているといえる。

授業の主な内容および学習方法については以下の通りである。

1. 講義

講義の主なテーマは、和太鼓の歴史や伝統と、世界中の人々を魅了する日本の太鼓という 2 つの内容で設定されているが、後者に関して学生は、海外における和太鼓演奏の動画から観客の盛り上がりや声援の様子を読み取って、日本と比較した和太鼓演奏の文化的な違いなどについて議論するという課題に取り組んだ。

結果、日本と比較して海外においては、「演奏後の歓声の量が圧倒的に多く、ライブ会場のような雰囲気」、「舞台演出も派手で、司会の MC が大きな声で会場を盛り上げる」、「観客が手を上に持ち上げ拍手し、スタンディングオベーションも多い」などのような特徴が挙げられた。そして、日本人は和太鼓の演奏者と一線を引き、静かに演奏を堪能してから演奏後は主に拍手によって演奏者を賞賛するが、外国人は演奏者と一体となって、むしろ演奏に積極的に参加しようとするという大きな違いがみられた。しかし、「演

奏中は静かに聴いている」や「拍手のタイミングが同じである」などの共通点もあり、国民性や感情表現などが異なっても、目の前の素晴らしい演奏に心を動かされ、演奏者に対して心から賞賛を送るという、国境を超えた和太鼓の魅力が認められていることも分かった。

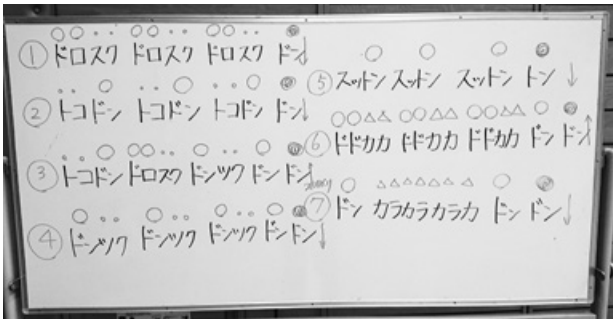
2. 実技

実技においては、和太鼓に必要な心構え、バチの握り方や構え方を確認したあと、主に２つの曲とそのリズムを練習する展開で授業を進めた。その際、「点で打つ」や「地打ち」などのような打ち方の基本と、「強弱を付ける」や「音と振り」などの演奏に必要な技術を身に付けるように、常にテーマを持って和太鼓の実践を行った。

異なるタイプの太鼓を使うことで練習のバリエーションが多くなり、メリハリのある内容で学生がモチベーションを維持し、充実した実践ができたように思う。また、履修者全員が講師の指導の下で同じ内容に取り組む全体練習だけでなく、一人一人が課題を持って自由に和太鼓に挑戦する自主練の時間も設けていた。しかし、和太鼓は、腕を大きく上げるための背筋や体幹を支えるための脚力など、総合的に全身の筋肉を使う運動であるためか、初めの頃は学生に疲労感がみられる場面もあった。それでも授業の後半では休憩時間にまで学生が太鼓を打つ様子がみられ、日本文化としての和太鼓に魅了されて取り組むうちに、自ずと体力も付いていったようである。このような効果がみられる点に、運動文化として和太鼓が注目される理由があるのではないだろうか。

新座体育館にて和太鼓を体験学習している様子

以上の体験学習に加えて、プロによる和太鼓演奏の映像資料や、曲の練習動画をGoogle Driveにアップロードし、授業時間外にも学生が振り返り学習ができるように学びの環境を充実させるような工夫もしてみた。



練習曲の楽譜。言葉や記号でリズムや強弱などを表している。

3. ワークショップ：「みんなで課題曲を作りましょう！」

「はじめての和太鼓」を履修する学生は基本的に初心者であったが、学生が授業で学んだ曲のリズムや演奏に必要な技術などを自分なりにアレンジして、課題曲を作るというワークショップを実施した。その結果、さまざまな学部や学科から集まってきているように、多様なバックグラウンドを持っている学生だったが、それぞれのグループごとにアイデアを出し合って、各グループ独自のテーマとストーリーを考え、それを踏まえた課題曲を作成することができた。

例えば、あるグループは、『越冬』というテーマで、「雪が深々と降り始め、段々と雪の量が増えてきて大雪になり、そのうちまた雪が少しずつ止んできて生き物も冬眠から目覚めて、穏やかな春が訪れる様子を想像」した曲を作成し、演奏を通して表現した。それ以外にも、クリスマスをイメージしてサンタの帽子をかぶったり、曲のテーマに合わせた服装の色にしたりするといったような演出もあり、和太鼓の初心者であるとはいえ、豊かな想像力とクリエイティブさや、独自の発想で物事を創造する高い能力が課題曲作りにおいて発揮され、充実したワークショップになったといえる。

4. 和太鼓の演奏会

本科目の最終目標に掲げたのは、履修学生による和太鼓の演奏会であった。「はじめての和太鼓」という初心者向けの授業のため、レベルの高い目標であるともいえるが、学生の努力や前向きな姿勢および積極性によって、最終授業にて合計６つの曲の演奏で構成された演奏会を開催することができた。

演奏会で学生は、オリジナリティのある課題曲の演奏に加え、太鼓の基本的な打ち方からリズムの掛け合いや太鼓打ち組とバチ打ち組の入れ替えまで、やや難易度の高い技術と工夫された曲を披露することができた。短い期間ではあったが、積極的な授業参加

により身に付けた技術などを大いに発揮できた演奏会となり、演奏会終了後の学生の笑顔と達成感にあふれた表情が印象的であった。学生にとって記念すべきはじめての和太鼓演奏であったこともあり、演奏会の録画も行い、動画という形で残すこととした。

おわりに

以上のように、1 年目の「スポーツスタディ 4 －はじめての和太鼓」は無事に終わり、履修学生からも「なかなか体験する機会がない和太鼓を演奏できてよかった」、「はじめて経験する太鼓という楽器を楽しめた」、「専門性の高い指導が受けられて貴重な経験となった」などのような肯定的なフィードバックも寄せられた。しかし、改善の余地があることも指摘され、次年度に向けて特に和太鼓の実践とその進め方のさらなる工夫について新たに検討していきたいと考えている。

最後に、本科目の担当を通じて、外国人である私も、日本文化でもあり、運動文化でもある和太鼓の魅力や楽しさについて履修者の学生とともに多くのことを学ぶことができた。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、留学生の履修は残念ながら叶わなかったが、今後、外国人学生が和太鼓を通して日本文化だけでなく運動文化としての魅力や楽しさを享受しながら、日本人学生との交流を深めることができるようにしたい。また、このように多様なバックグラウンドを持った学生が、和太鼓という日本の伝統文化や交流を通して、世界の多様な価値観や考え方などについても学習するよい機会になることを願って、これからもより充実した授業を提供できるように取り組んでいきたい。

ライトナー　カトリン　ユミコ